

対

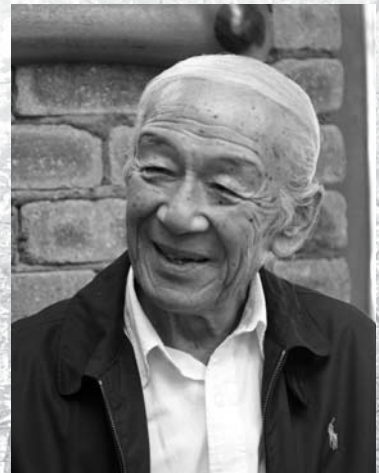
談



当麻 潔 (Kiyoshi Touma)
大阪ガス(株) エネルギー・
文化研究所 研究員

俳優として知られる柳生博さんは、現在、日本野鳥の会の会長や
コウノトリファンクラブの会長を務めるなど、これまで自然保護の方面
にも力をそそいでこられた方。個人的にも30年以上前から、山梨県の
八ヶ岳南麓で雑木林の再生を実践されてきている。今回は、柳生さん
のアトリエ「八ヶ岳倶楽部」にお訪ねし、その試みを紹介していただき
ながら、木々に囲まれた日々の暮らしと里山を中心とした生物多様性
保全の問題などについてお話をうかがった。

雑木林の再生から生まれた 人と自然とのつながり



柳生 博 (Hiroshi Yagyu)
俳優、(財)日本野鳥の会会長



森は人と人とのつながりをつくりだす



当麻 今回の特集に際し、日本の森や自然の現状を捉えなおし、木とともにある暮らしの可能性を考えようとしていた時に、柳生さんのここ八ヶ岳倶楽部での実践を知りました。それ以来、ぜひこちらにお訪ねしたいと思っていました。今日は、この土地で柳生さん自身が雑木林を再生させてきた、その経緯や人と自然と生きものたちが共に生きるすばらしさなどを中心にお話をお聞かせいただけたいと思います。

柳生 遠方まで、よくおいでくださいました。僕は、当初人工林だったところを、本来の雑木林に戻していく作業を、どちらかと言えば自分自身の楽しみとして、これまで33年ほどこつこつ続けてきました。それがここ数年、世の中から思いもかけず評価をいただいているようで、うれしいととも少し驚いてもいるんです。当麻さんはどう思われますか。

当麻 ここの雑木林は、森林管理のモデルとしても象徴的な存在だと思えます。日本は国土の約67%が森林で、自然環境保全、低炭素社会の実現、生物多様性の問題からも森を守ることの重要性が盛んに言われていますが、それを今後、持続可能な形でどう実現していくのかについては、なかなか上手くいかない。各地で試行錯誤をしているのが現状かと思ってしまうのですが、ここに来ると、その実例がちゃんとある。

柳生 そう言っていたたくとありがたいですね。その意味でわかりやすい例なのでしょうね。もうひとつ付け加えると、森と人間の関係性のモデルでもあるかと思えます。ここは一般の方に開放していますが、実際ここに来るとみんな気持ちが良いとおっしゃる。今、来訪されている方々も楽しそうでしょう。ご夫婦でも、より仲良くなる。働いているスタッフたちもそう。ここで恋をして、場合によっては地元の人と結婚する人もいます。何年かすると、そういう人たちが親になって、今度は子どもを連れてくる。そうやって、ここを中心にして大きな「家族」のようなものができているんです。

当麻 本当にそう。ここにいるとほっとします。先ほど案内いただいた雑木林の中も、枕木を並べて歩道にされていますが、あの幅もふたりが並んで歩けるように配慮されているそうですね。

柳生 カップルにちょうどいいでしょう(笑)。年配のご夫婦で来られても、「雑木林の中を歩くと気持ちいいね」と、いくらでも話すことがある。

当麻 木々の変化は、見飽きることはないですね。

柳生 この雑木林の一番の見所は、夕方の光に照らされている木々の幹だと思えます。人間が手を入れているからこそ、木々の間を光が通ってくる。木洩れ日のすばらしさを見ることができ。この、ほとんど木は僕が植えてきたものだけれど、その成長を見ながら、枝打ちをしたり、下草を刈ったりしてきました。

当麻 33年間ずつと、そういう雑木林づくりを続けてこられているのですね。

柳生 さっき言ったように、この場所を通じて、人と人とのつながりができてくる。森の良さというのは、コミュニケーションを生み出す場だということなんです。子どもはじつとしてられなくて走り回ります(笑)。それから、おじいちゃんやおばあちゃんが、自分の知っていることを孫に得意満面に教えるわけです。木や花のことや虫の話とかね。ミミズがここにいますよとか。

当麻 世代を越えたつながりも生まれてくる。自然のことが共通の話題になるし、季節ごとにも変化がありますね。

柳生 昔の里山では、地域の田や山や川、雑木林の管理をすることが日々の暮らしであり、そこは、ゆるやかな大きな「家族」の居場所だったんです。ですから、自分にとっての里山は、ひとつの共同体。この雑木林も、僕にとってはそういうものなんです。

当麻 ここを介しての人と人とのつながり、コミュニケーションが生まれてくる。確かにここに来ると機嫌が良くなりますね。

柳生 森という、大いなる生きものにだっこされている感じ。その中で季節が移ろうんです。

森との出会いから八ヶ岳倶楽部へ



当麻 柳生さんがこの地にやってこられたきっかけは何でしょうか。

柳生 ちょうど33年前、僕は俳優としてはそれなりに有名になって、人気も出てきたのですが、それに反して、実は家族とのバランスが少し取りにくくなっていったんですね。東京にいると息が詰まる感じ。その時に、少年時代のひとり旅で八ヶ岳に行ったことを思い出して再訪した。ここは、どことなく生まれ故郷と似た空気を感じさせる場所でした。それで、一度ここで暮らしてみようと思いついたんです。

当麻 柳生さんご自身は、それまでに里山づくりの経験や知識をお持ちだったのですか。

柳生 茨城県の田舎育ち。僕は次男坊だったので、祖父にいわば手塩にかけて育てられた。というか、里山の手入れの仕方や野良仕事をみっちりと仕込まれた。生きものの名前も幼い頃から徹底的に覚えさせられたんです。そんなことで、家でちよつとでもグズグズしている、祖父に「野良仕事しなさい！」と叱られた。里山は、地域みんなが共同で利用するところ。その世話はもちろん、しょつちゅう、近所の家の手伝いにも出されました。

当麻 子どもの頃から、里山の世話をし、その保全方法や意味を体感されてきたわけですね。ここに移って来ようと言われた当初は、ご家族の反応はどうだったんですか。



柳生 初めは大反対でしたが、最後にはついてきてくれました。ただし子どもたちの手前、妻には、毛虫や蛇を見ても、「キヤ〜」とだけは言わないでとお願いをした(笑)。いずれにしても、東京にいる時の親父は、かつこ悪いが、ここにいる親父は結構かつこいいと、妻や息子たちも思っていたようです。

当麻 息子さんたちも、お父さんの姿を見て、自然との接し方の基本を学んだ。

柳生 道具の使い方もそうだし、植生なども一つひとつ具体的に教えられた。僕の方も夢中で教えた。でも、子どもはそういうのが好きなんです。当麻 今は里山の荒廃が全国で進んでいる状況ですが、柳生さんはいち早くその再生と保全に取り組んでおられたことになりましたね。

柳生 多くの森が放置されていて、間伐も枝打ちもしていない。光が入らなくて、生きものたちも少なくなつて、沈黙の森になっている。ここも最初は、カラマツが主体で、密生した枝が空を覆っていました。僕にとつての里山は、木々の間を光がさしこみ、それぞれの草木がさまざま表情を見せ、季節ごとに多くの生きものたちでにぎわう場所。だから、全く違うわけです。それで、ひとりでこつこつと自分が思う雑木林をつくり始めたんです。

当麻 それも、この付近にある木々を譲り受けたりしながら、この土地にあつてしかるべき種類の木を順々に植えていかれたそうですね。

柳生 八ヶ岳南麓の本来の雑木林に戻していくんだというつもりで、徹底的に地元の木を植えていきました。

当麻 雑木林を復元するというのは、当時としてはおそらく珍しい試み。やはり柳生さん自身の子どもの頃からの体験があったからのこと

でしょうね。有名な俳優の方が雑木林をつくっているというのも、世間の注目を集めたのでは。

柳生 そういうことを10年くらいやっているうちに、気がつくのと、いつの間にか見学者が増えてきたんです。垣根もなしの開放的なので、いろんな人がやって来て雑木林の中を歩いている。時には、早朝から、大勢でワイワイ言っている。

当麻 個人のところなのに、プライベートも何もありませんね。

柳生 見ていただくことは構わないのですが、セキュリティの問題がある。たばこを吸う人もいますし、山火事は絶対に出してはいけません。それで20年ほど前に番小屋でもつくろうかというような話から、そこをパブリックスペースにしようとなつて、だんだんと今みたいな形になった。ギャラリーでは、妻が前から応援していた木工などの作家の作品を展示紹介して、結構ファンの方も増えてきたんです。でも、その間に僕がやっていたのはほとんど野良仕事ですね。

かつての里山は生きものたちの宝庫



柳生 自然に対して人間が手を加えるのは絶対悪ではありません。実際、日本の国土の8割ほどには人間の手が加わっている。田んぼ・集落・雑木林・小川を合わせて、僕は里山4点セットと言っているのですが、それがやはり原風景。

当麻 確かに、里山は人間の営みによって長い年月に渡って維持されてきたもの。私たちにとつて、それは、どこかなつかしい風景ですね。

柳生 そうなんです。ここを歩くと「なつかしい」ってみんな言う。おもしろいことに、例えば子どもたちと田植え体験などをした時でも、終わった後の感想文に、「とてもなつかしかったです」と書く子がいるんですよ(笑)。

当麻 田植えをそれまで一度も体験したことがなくてもなんですね。

柳生 やはり日本人のDNAに刻まれているのかもしれないですね。反対に、西欧では手つかずの自然こそ貴重という考えが根強くある。

当麻 自然を大きく改変して利用するのが西洋的な考え方だったのでしょうね。日本では、里山のシステムを代々受け継いできている。

柳生 それは、自然に関わり、手を入れ、むしろ自然と折り合いをつけていくというもの。森に関して言うと、その確かな指針が、先ほど話したように木洩れ日なんです。それから鳥から見た場合は、水面みなも。かつての日本の国土はいわば水びたしだったんですね。田んぼにはいつも水がたたえられていた。

当麻 今の田は収穫前になると水を落とし、次の春まで乾いたまま。それは稲刈りなどを機械化するためですね。

柳生 豊岡では、農業や化学肥料を使わない稲作を進めていますし、冬にも田んぼに水を入れる。そういう農業をして、コウノトリが餌をとれる里づくりが進められた。現在コウノトリは44羽で、2010年には9羽が巣立つたんです。

当麻 逆に、機械化を進め、農業や化学肥料を無自覚に使った稲作は、生物多様性保全にとつては悪循環になる。

柳生 実際、日本人の生きものへの思いも希薄になっていました。結局は人間の価値観、生き方の問題なんですね。効率ではない何を求めるのか。

当麻 豊岡では新しい方向性が示されています。

当麻 ここに来た人はそれを思い出すんですね。だから、どこかなつかしい。子どもたちにとつても、ここは本当に楽しいところだと思います。

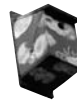
雑木林の中には子どもが通る細い道がありますね。
柳生 枝が張り出しているのので、大人はしゃがんでいかないとだめだけど、子どもは走り抜けることができる。身体全体を使って、雑木林の中で一日中遊んでいられる。

当麻 そこには虫がいて、実が成って、鳥がたくさんやってきて、糞を落として…、それらが循環していくわけですね。

柳生 僕が野良仕事をしていると、鳥たちが集まってくるんです。土を掘り返したり、枝を払ったりすると、その後には虫が出てくることをちゃんと知っています。鳥の好きな実が成る木も選んでたくさん植えている。だから、冬には、カラ類やイカル、ウソなどが混群になってやってくる。雪の中にまるで鳥の花が咲いたよう。生きものたちのにぎわいがある場所なんです。

当麻 柳生さんが言っておられる、「人と自然の仲の良い関係」というのが具現化されているんですね。

生きものとの暮らしのつながりづくりを



当麻 都市に住んで働く我々も、都市生活の利便性をただ享受するだけでなく、自然と共にある暮らしについて、今、何らかの答えを求めているように思います。これからの時代、どうしていくべきかと。

柳生 それぞれの人が、自分たちが住むその地域の緑をどうするか、一度考えてみてほしいですね。森や林は文化だと思っんです。先ほど言ったように、かつて日本人は自然とぶつかり克服するのではなく、折り合いをつけて生きてきました。2千年以上の長きに渡ってそうしてきたんです。その象徴が里山です。日本では、生きもののはり山は里山の周辺にいます。でも、このままでは生きものがどんどん減っていく。

当麻 里山のような二次的な自然地域を世界的に保全していこうという取り組みが「SATOYAMAイニシアティブ」で、先般、名古屋で開かれた生物多様性条約第10回締約国会議でも提唱されていますね。

柳生 世界に発信するとともに、日本においても、持続可能なシステムとして、これを改めてどう具体化していくのかをしっかりと考えていきたい。僕は2010年の都市緑化月間のイメージキャラクターなんです。同じような考え方から、都市の緑化を進めることも重要です。

当麻 都市の緑化も、そこだけの話ではなく、都市と里山をつなぐようなかたちで捉えなおしていかないとけない。

柳生 まずは都市の中に、生きものが好きな場所をつくっていく。小さく



てもいいんですよ。土と緑があつて、水があると、鳥とか虫は飛んでくる。次第に生きもののにぎわう。そうすると、人間の方もいろんな生きもの存在に思いを馳せることができるようになる。

当麻 生きものとの人間が共生する環境をどうつくりだしていくのか。生きものとの暮らしのつながりづくりですね。実はNEXT21という大阪ガスの実験集合住宅でも建物全体の緑化を試みているんです。その1階には日本野鳥の会大阪の事務所もありますが、近くにある大阪城などからもいろいろな鳥が飛んできます。屋上の木にかけた巣箱でシジュウカラが子育てをしているのも確認されています。

柳生 ここでもシジュウカラはよく営巣するんです。シジュウカラの親は1日に300〜400匹の虫をヒナ鳥に与えるそうですね。だからいろんな木々や植物が周囲にあつて、虫がたくさんいる環境でないといけない。

当麻 その意味では、緑地や公園、お寺や神社の森などがやはりつながっていることが大切ですね。小さな木や水でも、鳥が見つけてくれる。

柳生 渡りをする鳥などは、都市域を通過してくる。だから、その自然がなくなったら、山にやってくるのができない。青く美しいオオルリなども、毎春、南方から大阪や東京あたりを経由して、この付近の山々にやってきて夏を過ごし、季節が変われば南へ帰っていくんです。日本の国内でも、大半の鳥が移動を繰り返している。そういう鳥たちにとっては、経由地の自然を守ることが絶対に必要なんです。

持続可能性は自然との折り合いの中から



当麻 都会の環境と里山の自然とは、いろいろな点でつながっているんですね。都会のビルの窓の外に、緑があつてそこに鳥がやって来るのがいい。現実には、落ち葉や虫のことや鳥の糞害とか、都会ではなにかと問題になりそうですが、それを受け入れて、上手くやっていく方法を探



柳生 博 (やぎゅう・ひろし)

俳優、(財)日本野鳥の会会長、
コウノトリファンクラブ会長

1937年茨城県生まれ。俳優座養成所を経て、NHK朝のテレビ小説「いちばん星」の野口雨情役で脚光を浴び、その後、テレビ、映画、舞台で活躍。近年ではNHK「生きもの地球紀行」の出演及びナレーションでも知られる。また、33年前に山梨県八ヶ岳南麓(北杜市大泉町)にアトリエを建て、荒れ果てた人工林を本来の雑木林に戻すため、広葉樹を中心に約1万本以上の雑木を家族と共に移植。現在は一般にも開放し、年間約10万人が訪れる。主な著書は、『森と暮らす、森に学ぶ』(講談社)、『それからの森』(講談社)、『柳生博の庭園作法』(講談社)、『和暦で暮らそう』(小学館)など。

当麻 潔 (とうま・きよし)

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 研究員

大阪ガス株式会社入社後、供給部門、技術開発部門を経て、(財)エネルギー総合工学研究所に外向。帰社後環境部を経て現職。研究領域は、環境・エネルギー。



八ヶ岳倶楽部

山梨県北杜市大泉町西井出 8240-2594
TEL: 0551-38-3395
<http://www.yatsugatake-club.com/>

ることがとても大切です。

柳生 そうなんです。初めから雑多なものを排除する方向でまちをつくるのではなく、自然のあれこれと折り合いをつけていくやり方を考えていくべきです。建物も完全に締め切るのではなく、縁側のように、内でも外でもない、そんな空間を大切にしたい。

当麻 鳥の姿や風の音も、すべてが感じ取れる環境で生きていくのが、人間にとってはやはり好ましい。

柳生 里山という、持続可能なシステムを続けてきた国なのに、このところの日本人は、自然に対してかなり無慈悲なことをしてきたと思います。我々はここに来て大反省し、ようやく方向転換してきています。プラネットアース全体として考え、そしてそれぞれの地域で対応するべき。西欧の人たちも大きく変わってきています。

当麻 日本でももう一度昔のことを思い出して学ぶべきですね。

柳生 豊岡はその好例。以前から何年も、例えば田んぼの学校といった形で、子どももいっしょになって生きもの調査などをやってきたのですが、そうした試みの積み重ねが地域の人たちを動かしていったのだと思うんです。コウノトリが人間と共存できるような農業を可能にする社会に向けて、みんながもう一度思いを共有していくべきなんです。

当麻 自然と人間との間の持続可能な循環をどう取り戻すかなどの点で課題はまだ多いです。でも、森や木、里山との関係性を見つめ直すことは、これからの我々の暮らしや生き方の全体に関わってくることだと思います。

柳生 そうなんです。その意味で言うと、森に関わるには本当の意味での知性が大切になってくる。むしろ都会にいるより知性が育つように思います。実際、情報は遙かにたくさんある。一本一本の木の変化を知る。本当に見飽きることがないし、新しい発見ばかり。

当麻 自然から学ぶことがいっぱいある。視野が広がり、また心身が清められるようにも思います。

柳生 都会に住むお父さんお母さんたちには、とにかく子どもを野山に連れ出してほしい。図鑑を持って行って、いっしょに木や草や虫や鳥や魚の名前を覚えてほしいですね。

当麻 生きものが身近にいた時代のことを思い出して、大人が得意満面になって教えてあげるのがいいですね。子どもの頃から人と自然とのつながりの重要性を学ぶことにより、持続可能な生物多様性の保全につながります。今日はすばらしい場所で、楽しくお話をうかがいました。ありがとうございました。

CEL